ソビエトにおけるプロスポーツの成立

——スポーツ組織におけるペレストロイカの動向——

佐　野　　裕*

About a birth of professional foot-ball sport club in USSR

—a trend of "perestroika" in a sphere of sport organization—

Hitoshi SANO*

Abstract

According to a daily newspaper "Soviet Sport" (19. Sept. 1987), it reported that professional football sport club was borned in USSR which named "Dnepr".

We can say that this is a phenomenon of PERESTROIKA as a new wind of reformation of Soviet society. This means that professional sport has been recognized as a social useful labour by Soviet government. This would be a great social experimentation in a socialist society.

Professional sport club as a self-supported organization must not depend on the public budget, it depends on a self-paying basis.

We assert that this reformation of sport organization is combined with a policy of reinforcement for elite sport in USSR.

I. はじめに

「ペレストロイカ」「グラスノスチ」「ウスコレニエ」などのロシア語で象徴的に語られるソビエトの社会変革の動向には，興味深いものがある。

1987年9月19日，日刊新聞「ソビエツキースポルト」にプロフットボールクラブ生誕のニュースが掲載された。日本の新聞にも報道されたので，おおかたの知るところである[1)]。

「ソビエツキースポルト」の記事のヘッドラインは，次のような文章で綴られている。『事業意欲の例，ソ連国立銀行支店ドニエプルペトロフスキー都市銀行に特別口座——口座番号 700079 が開設される。この口座の設置者は，生産連合体や企業，工場ではなく，新しい原理に基づく組織体——フットボールクラブ《ドニエプル》である』。

ところで，A. B. セレブリヤコフ，H. И. ポノマリョフも論じているように，これまでソビエトにはプロスポーツが成立する経済的，政治的，イデオロギー的，文化的基盤は存

* 保健体育教室 (Dept. of Physical Education and Health)

在しないとされてきた[2]。また，ボディビルは「不道徳」「非価値的」なものとして断罪された過去があり[3]，N. N. シュナイドマンも指摘するように，ヨガは「神秘主義と観念論哲学に立脚するもの」として貶価せしめられてきた歴史もある[4]。今日でも女性は，サッカー，アイスホッケー，ボクシング，サンボレスリングなどの実施が禁止されている[5]。プロスポーツの成立に際して，このようなスポーツ価値論についての理論的転換がはかられたのか否か。

II. スポーツ価値論の研究状況

B. П. トガリノフによれば，マルクス主義価値理論の研究は哲学分野においても，まだはじまったばかりであるという。問題それ自体の「適法性」が哲学分野で認められるようになったのは 1960 年代後半以降のことである。ソビエト哲学界では，従来「価値論」(аксиология) という用語自体がカント主義の出自と見做され，観念論，神学のひとつとして断罪された。「価値理論」(теория ценность) は，そうしたブルジョワ価値論と区別する用語として，哲学分野における問題それ自体の適法性を獲得するために使用されてきた。しかしながら，研究対象・方法論が同一の学問には同一の分科名というのが通常である。ソビエトにおいても諸々の価値に関する研究の発展と必要性の中で，今日では相対的に自立した個別科学，マルクス主義価値論 (марксисткая аксиологическая теория) として確立しつつあるという[6]。

こうした価値論をめぐる学問的状況の下においては，当然にスポーツに関する価値論的研究も充分に展開されているとは云い難い状況にあることが推察されよう。

ソビエトにおけるスポーツの価値論的研究に積極的にアプローチしているひとりに，B. M. ウィドリンを挙げることができる。ウィドリンは，論文集「現代社会におけるスポーツ」に編集責任者として参画し，トガリノフの価値論などを引用してスポーツの価値論的アスペクトについて論及している[7]。田中は論文「ソ連の身体文化理論の確立をめざす三つの系譜」において，このウィドリンの見解を現代ソビエトの身体文化理論を代表する理論的系譜のひとつに位置づけている[8]。しかしながら，ウィドリンの論文は価値論として充分な展開を見ていない。ウィドリンの諸論文に特徴的なことは，スポーツの価値と見做される事柄を分類し，スポーツの価値は健康や身体の発達として体現したり，記録や競技会における順位や結果としてあらわれたりするだけでなく，労働や軍事力あるいは諸個人の文化や教養という姿をとって存在すると主張するにとどまっている点にある。即ち，諸価値それ自体が何故価値的なものとして認識されるのかという肝腎の価値論的説明がみられない点にある。田中が重要な系譜のひとつとして位置づけたウィドリン等の構造的に図示した価値論的アスペクト図も，諸価値相互の内的関連や用語の概念規定がなされないままに提示されているにすぎない。従ってこれらの論文からソビエトの身体文化論における価値論的動向を論ずることはできない。

1987年のプロスポーツ成立後，既に2年経過したが社会主義社会におけるプロスポーツに関する理論的展開は未だにない。プロスポーツに関する法律的整備が先行し，実践を導く理念は不明確なままである。全ソ連邦内閣体育スポーツ委員会の月刊科学理論誌「身体

文化の理論と実践」(ТиПФК) においてこの問題が論じられることもない。ただ，全ソ連邦内閣体育スポーツ委員会，全ソ連邦労働組合中央評議会の機関紙「ソビエツキースポルト」において，独立採算制をとる所謂「プロスポーツ」の話題が，ジャーナリスティックに取りあげられているだけである[9]。

プロスポーツ否定論からプロスポーツ容認へと，価値観の180度の転換がはかられたのであるが，スポーツの価値とはなにか。こうした価値観の転換という問題を理解するために，「価値」「価値意識」などの基本概念について若干の価値論的論議を試みる。

III. スポーツの価値と価値意識

価値問題は，問題の性質上，概念規定それ自体が多義的で主観的にならざるを得ない側面がある。

見田によれば，価値とは人々（評価主体または価値主体）によって，対象（価値客体）に付与される「主観的属性」であり，社会的，歴史的に形成された［構成概念］であるという[10]。価値客体は価値主体の評価を通して価値として顕在化する。別言すれば，価値は客体の側にある。価値に対応する主体の側の要因は，価値意識として価値そのものから概念上区別される。価値であるのは人々が評価するもの，評価の対象である。価値と評価は区別されなければならない。価値であるのは外的世界の現象ならびに事物及びその属性である。評価行為の結果として対象は「非価値］と判断されることもある。そしてこうした評価行為の歴史的社会的蓄積の結果として，その対象（客体）の［社会的価値概念］が確立される。価値概念は，対象に対する肯定的評価において形成された対象のもつ価値の観念的表徴といえよう。

トガリノフは『価値とは，特定の社会または階級に属する人々及び個々の人格にとってかれらの諸要求と諸利害（関心）を充足させる手段として必要（必須，有用，快適等々）であるところの諸対象，諸現象及びそれらの諸性質のことであり，さらにまた規範，目的，または理想としての諸概念と諸動機である』と規定している[11]。もちろん，個別主体の評価行為は，それぞれの価値意識（価値観）によって異なる。一般に個別主観がなにを価値あるものと判断するかは，価値判断の基準によっても異なり，価値判断の準拠枠，たとえば世論とかイデオロギー，規範とか信念など個別主体が価値判断に際して準拠する前提とか所与によっても異なる。ここで価値判断の規準とは，たとえばAという個別主体は，物事を快――不快の座標軸で判断するが，他の主体Bは損――得の座標軸で判断するというような個別主体の判断の物尺のちがいを意味する。通常，個別主観はその社会の支配的な価値体系に収斂する。ソビエト人は，日本人ともアメリカ人とも異なるロシア的生活様式，価値体系，文化体系をもっており，共産主義イデオロギーがひとつの支配的な準拠枠となる。しかしながら，個別主観は支配的な価値体系に常に受動的に従属するものではない。支配的な価値体系に制約されつつ，それを批判的に評価し変革する能働性をもつ側面にも留意しなければならない。個人の主観的価値意識は，社会に規定され，媒介されながら相対的に自立性を保ち，社会に働きかけていくものである。

ところで，本稿の立場は価値の物質的基礎と価値意識の相対的自立性を認める。スポー

ツの諸性質——スポーツの内在的価値と規定する論者もいる——[12]は，価値主体の客体となるかぎりでのみ価値をもつ。その意味で，たとえばスポーツの［楽しさ］という価値は，スポーツの客観的性質に依存すると共に，個別主観の価値評価にも依存している。したがって，スポーツを楽しくないと価値評価する個別主観の存在を，当然としなければならない。もちろん，スポーツの［楽しさ］という価値概念は，あくまでもスポーツは楽しいという経験をもつ多数者の感情を基底に形成された概念であり，主観的評価の歴史的積み重ねによって形成された社会的価値概念ということはできよう。こうしたスポーツの価値意識の発生は，スポーツへの欲求を出発的とする。そしてこのスポーツ欲求自体が既に先行する歴史的文化的諸条件によって媒介され，規定されていることはスポーツの歴史の示すところである。このスポーツ欲求は対象によって触発され，スポーツ活動の日常的実践の中で次第に意識的，能働的なものへとなっていく。即ち，スポーツに対する価値主体の価値意識は，特定のスポーツと結合した即自的，個別的なものから次第にスポーツ一般の価値認識へと普遍的，対自的なものへとなっていく。こうした個別主観の歴史的社会的総体がスポーツの社会的価値概念を形成することは既に述べた通りであるが，ついにはそれはまた理想的なスポーツの概念をも構成するのである。そしてこうして形成され理想化されたスポーツ概念は，今度は逆に価値の準拠枠として価値主体の価値意識に評価の尺度を与え，もしスポーツの現実がその理念に背反し，あるいはまた面白くなければ，それらをその尺度に適合するものへとルールを変えたり，スポーツにおけるモラルやスポーツインスティテュートを変革する能働性をも評価主体に与えるのである。まさしく高田の論ずるように「価値意識は実践を方向づけ，規制する」のである[13]。

ソビエトにおけるプロスポーツの成立は，こうしたその社会において歴史的社会的に形成されたスポーツ理念に照らして，いはば必然的に生起した社会的実践であるのか否か。ソビエトのスポーツは，全面的に発達した共産主義的人間の形成に奉仕するものとして，その限りにおいてスポーツのもつ諸機能，諸性質が価値あるもの（ценность）として，あるいは非価値のもの（неценность）として評価されてきたのである。女性に対する一部スポーツの禁止も，女性に対する社会的差別ではないと説明されている[14]。

しかしながら，こうしたスポーツに関するイデオロギー状況に一定の変化が見られるのも事実である。たとえば，かって「非価値的」なものと断罪されてきた［ボディビル］が社会的に公認され，ボディビル批判の論陣を張った当の「ソビエツキースポルト」が，現在では米ソの交流試合の記事を掲載するまでになっている（資料 No. 1）。

プロスポーツの成立もこうした変化のひとつであるが，ボディビルとは異ってそれを肯定的なものと評価する社会的価値概念が成熟していなかったことは明らかである。ではなぜプロスポーツは成立したのか。それはスポーツの価値論的転換から導かれたのではなく，ペレストロイカの政治経済学から導かれたのである。

IV. 最初のプロフットボールクラブ《ドニエプル》

ドニエプルサッカークラブは1987年現在，約15,000人の会員を擁し1988年には20,000人の会員獲得を目指している「任意スポーツ団体」（Добровольное спортивное общество

○ КАК ВСЕГДА, В КОНЦЕ НЕДЕЛИ

Фото В. Каратаева.

● НА НОВОМ ВИТКЕ ИНТЕРЕСА

Дитя подвалов

Считанные дни остались до апрельского дебюта сборной СССР на чемпионате Европы по культуризму в Норвегии. С каким багажом подходят наши атлеты к своему первому по-настоящему ответственному старту?

Вот что рассказал секретарь московской федерации культуризма и член всесоюзной федерации Леонид Остапенко:

— Хотя Федерация культуризма СССР появилась только в апреле 1987-го, существует этот вид спорта в нашей стране уже 20 лет. Когда-то культуризм подвергали гонениям, утверждали, что он якобы вреден для здоровья. Вот и прятались секции по подвалам, и до сих пор мы только еще стараемся их вывести оттуда, сделать атлетизм полноправным видом спорта, в чем большую помощь сейчас нам оказывает Госкомспорт СССР.

И все же проблем пока больше, чем успехов. Федерация существует только за счет спонсоров, в роли которых выступают в основном кооперативы. Даже собственного счета у федерации пока нет... А ведь мы могли бы сами содержать себя за счет показательных выступлений да еще направлять средства на расширение сети клубов. Есть идея назначать спортсменам стипендии, чтобы дать им возможность сосредоточиться на тренировках.

Но нельзя забывать и о первых удачных шагах. После образования федерации постоянно растет число международных контактов. Начались обмены делегациями в основном для показательных выступлений. Матч в Ленинграде со сборной США — первый официальный старт, итоги которого обнадеживают.

В ближайшее время тренерским советом будет назван состав нашей команды на первенство континента, после которого планируется участие советских спортсменов и на чемпионате мира в Париже в мае этого года, куда отправятся победители чемпионата СССР.

(Корр. ТАСС).

資料1　ソビエツキースポルトの記事

—ДСО）のひとつである。同クラブは，サッカーの技術指導講習会や試合のプロモートなどの大衆的文化的プログラムを実施し，ドニエプルのシンボルマーク入りの記念品やバッヂの販売，出版活動など各種の事業活動をおこなっている。管理指導部門としてソビエトを設置し，ソビエトは幹部会と代議員を選出する。幹部会は主任トレーナの任免や選手の雇庸，解雇などの問題にたずさわる。クラブの位置するウクライナ共和国ドニエプルペトロフスキーの労働組合州評議会（облпрофсоюз）が上部機関として同クラブの事業活動を管轄する。

ドニエプルは1988年度の全ソ連邦サッカー選手権において優勝したが，チームの主任コーチ У. クチェレブスキはその理由について次のように語っている。即ち，独立採算制の経営形態が，選手の試合に対する専門家意識，職業意識を高め，それが優勝へと導いたと分析している[15]。

ドニエプルはプロ化への発足に際し，その財政的基盤として 1）クラブ入会費，競技会入場料などの収入見込，年間 60 万ルーブル。2）個人会員からの年間会費収入15万ルーブル（年会費 5 ルーブル）。3）クラブのシンボルマーク入り記念品，バッヂの販売などによる収入 5 万ルーブル。4）広告収入。5）団体加入費（коллективное взнось）など，以上の年間の総収入を 100 万ルーブルと見積っていた[16]。その収支決算によると，1）商標入りスポーツ用具の生産販売。記念品や選手のカラーポスター，コーヒーセットなどの販売収入 40 万ルーブル。2）競技場の入場料などの興業売上げ 30 万ルーブル。3）競技場内の掲示板への広告募集で 15 万ルーブルの収入。4）パンフレットなどの出版販売による収入 10 万ルーブル。5）ユージン技術工場など後援団体からの寄付。以上の年間総収入 110 万ルーブル，支出総額は 100 万ルーブル，純益は 10 万ルーブルと報告された[17]。

独立経営主体としてのプロスポーツクラブの財政的基盤確立のポイントは，試合に勝つことである。選手の給与を，試合の成績とチームへの貢献度によって決定するという，所謂「能力給」の導入は，選手の志気に好影響をもたらした。今後は合理的で説得力のある選手査定のシステムの整備など，興業成績の向上につながる体制の確立が要請されている。

とはいえ，ウクライナの功労トレーナー Г. ジュティークは『このような実験的な試みは，かつてない程良好な環境条件下にある』『困難な道かも知れないが，独立採算制度の道へ大胆な一歩をわれわれは踏みだした。選手を信頼し，集団の力を信頼して可能性を追求していきたい』と語っている[18]。

「ソビエツキースポルト」は，ドニエプル・クラブの事業意欲を積極的に支持するキャンペーンを展開した。『独立採算制《ドニエプル・クラブ》の試みは，他の経済部門に“扶養者”（иждивенец）になるなということを示している。ドニエプルは，事業における国家との関係の在り方を示した。おおかたの援助を期待したい』と，国民にその支持を訴えている。

ソビエトにおけるこのようなプロスポーツの成立は，スポーツ技能を不特定多数の観客に見せることによって生活の糧を得る職業としてのスポーツ労働が成立したことを意味する。体育教師やトレーナー，コーチなどの職種は専門職として既に確立しているが，プロ

スポーツの誕生とは，スポーツ演技あるいはスポーツ技能を対象化した一過性のスポーツ作品を売るスポーツ労働が，ひとつの社会的有用労働として市民権を得たことを含意する。しかも重要なことは，スポーツ労働が単なる社会的有用労働として認められただけでなく，資本主義社会におけると同様に，営利を追求する企業活動，商業活動としてスポーツ労働が成立したことを意味するのである。このような国や公的組織からの補助なしに財政的自律性をもったスポーツ組織が，今後の在るべきスポーツ組織体のモデルであるとする方針は，他の経済部門におけるペレストロイカの動向と軌をひとつにするものである。「ソビエツキースポルト」は，プロスポーツの成立を実験的（экспериментальный）という限定詞をつけて報道したが，将来は全体への普及を前提とした試みであったことは，その後のいくつかのスポーツ組織に関する規約改正や法的整備の経緯からみて明らかである。

V. 任意スポーツ団体（ДСО）の規約改正

これまでソビエトのスポーツ界には，資本主義社会におけると同然の，営利を目的としたプロスポーツは存在しないとされてきた。ただ，エリートスポーツにおける所謂「ステートアマチュア」がスポーツ専業のプロスポーツ同然の存在として，西側諸国において云々されてきただけである。ソビエトではスポーツを楽しむ場合，身体文化コレクチーフあるいはスポーツクラブに所属する。身体文化コレクチーフは体育スポーツの基礎組織（組織人員15人以上）であり，地域主義・産別主義（территориально—производственный принцип）の原則にもとづいて組織される[19]。組織人員及び活動レベルにおいて優れていると認定された身体文化コレクチーフは《スポーツクラブ》という名称を名乗ることができる。これらの身体文化コレクチーフには，自立的組織（самостоятельная форма）と連合型組織形態（объединенная форма）の二つの形態がある。後者の組織形態は50～100人規模の小さな身体文化コレクチーフがそれぞれ連合して組織されるものである。

スポーツ愛好者の自発的自由意志にもとづいて組織されるスポーツ団体は，「任意スポーツ団体」として登録され，労働組合，官庁，軍，農村，学生の産業別に，都市，農村，地区管区，地方，州，共和国，連邦と重層的に組織される。個人会費は年間3ルーブル，入会資格は14才以上と規約に定められている。こうした身体文化・スポーツクラブの任意スポーツ団体には，官庁スポーツ組織として「ディナモ」「トルードヴィエ　レゼルビ」。軍関係組織として「ダサフ」，工業・建設労働者組織として「トルード」「アバンギャルド」「クラスノエズナミヤ」「メフナート」「エンベーク」「ガンチアジ」「ネフチー」「ジャリギス」「モルトバ」「ダウガバ」「アルガ」「タジキスタン」「ザフメート」「カリヨフ」「アシュヘタンク」の15の ДСО。その他の産業労働者組織として「ブルベンストニク」「ボードニク」「ゼニート」「ロコモチフ」「スパルターク」。農村労働者組織として「ウラジャイ」「カロース」「パフタコール」「カイラート」「メスフール」「ニャムナス」「ハシロート」「セバン」「イウート」の9の ДСО。その他「ユーノスチ」「ОСВОД」など全部で36の任意スポーツ団体がある[20]。

プロスポーツは，このような任意スポーツ団体に登録されたスポーツクラブの中の企業

意欲，事業意欲をもった組織によって結成されたのである。

この任意スポーツ団体の規約改正案が，1987年10月21日の連邦内閣体育スポーツ委員会の機関紙，日刊新聞「ソビエツキースポルト」に発表された[21]。3ヶ月の下部討議を経て1988年4月，「労働組合全ソ連邦任意体育スポーツ団体」(ВСДФСО по профсоюз) 第1回大会において一部**修正**のうえ採択された。新規約は，団体の名称を「任意スポーツ団体」から「任意体育スポーツ団体」へと改め，第一章「総則」(1～3項)，第二章「個人会員，その権利と義務」(4～9項)，第三章「団体会員」(10～14項)，第四章「組織運営」(15～26項)，第五章「最高議決機関」(27～33項)，第六章「共和国，地方，州環状地区，都市，地域などの組織の運営」(34～40項)，第七章「身体文化コレクチーフとスポーツクラブ」(41～56項)，第八章「国家及び社会的組織との協同」(57項)，第九章「資金及び財政」(58～65項)，第十章「組織・機関の権利」(66～68項) というように，10章68項から構成されている。改正規約によれば，任意体育スポーツ団体は大衆的社会組織であり，ソ連共産党指導の下に民主主義，公開性，創意性を基礎に活動し(1章1項)，少数は多数に従う民主集中制が組織の運営原理であることが明記された (4章15項)。上級の指導機関は上からの任命制ではなく，下部組織からの選出——снизу доверху によると規定された。その投票形態は複数候補による公開投票あるいは秘密投票によるとした (4章15項及び18項)。財政的に自立した任意体育スポーツ団体は法人格を有し (10章66項)，その資産の所有形態は「社会的所有」であると，その性格が規定された(10章61項)。任意体育スポーツ団体の規約改正は，大衆スポーツの一層の発展と社会主義的国際主義，ソビエトパトリオティズムにもとづく国際友好を目的としている。特に第四章の「組織」面における規約に明記されているように，各級組織，機関の指導部の固定化による官僚主義の弊害，活動の停滞などの否定的諸現象を打破することを企図した組織再編の制度的保障は，同時に国家体育スポーツ委員会から相対的に自立して，各スポーツ組織が自らの創意性を発揮できる制度的地均しをしたといえる。

VI. 独立採算制スポーツクラブの法的基礎

前節で触れた「任意体育スポーツ団体の規約」改正に続いて，独立採算制 (хозрасчет)，自己資金調達制 (самофинансирование) のプロスポーツクラブ創設に関する法令が整備された。1988年8月，全ソ連邦閣僚会議，全ソ連邦労働組合中央評議会 (ВЦСПС)，全ソ連邦コムソモール中央委員会 (ЦК ВЛКСМ) は「フットボール及びその他の競技スポーツの管理指導における改善及び主要なスポーツ種目の選手・チームの給与・経理面に関する追加措置」という法令を採択した (以下，『追加措置』と略記する)[23]。

『追加措置』は，これまでの中央集権的な上意下達の指導スタイルを改め，各競技スポーツ連盟が，体育スポーツ委員会及び関連する諸組織，団体，専門家らとの緊密な連携のうえに自らの創意を発揮できる制度的，法的根拠を与えるものである。各競技スポーツ連盟の自由裁量権を拡大強化し，スポーツ組織に対する政府の管理・指導面の改善を企図したこの『追加措置』は，他の一面ではスポーツに対する公的補助を削減する政策課題とも結びついている。

『追加措置』は，前節で論じた独立採算制のプロフットボールクラブ《ドニエプル》のような経営形態を法的に確認すると同時に，スポーツクラブに三つのタイプの組織形態があり得ることを明らかにした。

1989年より各競技スポーツにおける選手権チームなどの所謂主要チーム（команд мастеров）を基礎に，そのチームの経営主体としての準備状況にあわせて，次の三つのタイプのスポーツクラブを創設するよう義務づけた。

(a)タイプのスポーツクラブ

完全独立制採算制，自己資金調達制にもとづくクラブで，個人会費と事業収益などを活用して運営される。

(б)タイプのスポーツクラブ

個人会費及びクラブの事業収益と共に設立母体（организации—учредителей）からの組織的資金援助と部分的な自己資金調達によって運営される。

(в)タイプのスポーツクラブ

設立母体からの資金及び個人会費によって運営される。

これらのクラブは，その事業活動において国，社会組織，協同組合及びその他の組織の建物，観覧席付スポーツ施設（спортивно—зрелищные предприятия），その他の資産を無償で供与されあるいは賃貸することができる。就中，(a)タイプのクラブは，プロクラブとして独立採算制の方式を採用した場合，3年間は国税，地方税が免除されるという特典が与えられる。クラブは設立母体の規定に従って，その収益の中から生産・社会発展フォンド，労働賃金統一フォンド，為替決算フォンドを形成する。クラブの管理者は，クラブ労働委員会と職務内容，給与，割増し賃金（上限は基本給の 50% まで）及び労働条件の変更に伴う追加支払い等について交渉する権限を有する。所謂，独立経営主体としての当事者能力を有したことになる。また，通常の労働者の場合，勤続年数20年が年金支給開始の条件である。ソ連邦選抜チームの選手，功労マスター，国際スポーツマスターは，勤続年数が20年未満でも年金を支給され，選抜チーム退団後も，中等あるいは高等教育を終了（завершение）するまで，あるいは就職するまで，チーム在籍中の基本給の 70% を支給される。また就職後3年間は，チーム在籍中の基本給の 50% を支給されるが，それはソ連邦選抜チーム，各競技スポーツの選手権チームから退団後8年間を上限とすると明記された。

このように『追加措置』は，エリートスポーツ選手の抜本的な待遇改善についてのべると同時に，さらに，サッカー，アイスホッケーその他の競技スポーツ種目の全ソ連邦選手権大会の審判業務に対して，主任審判員には一試合当たり最大100ルーブル，副審判員には最大50ルーブルの賃金が支給されると規定している。ソビエト人の平均月収を217ルーブルとした時，これらの労働報酬の多寡が理解されよう。この『追加措置』は，物質的刺激をテコにエリートスポーツの活性化を企図したものといえよう。『社会的富の増加や損失が集団一人ひとりの所得水準にひびくようにすべきであるという』ゴルバチョフのペレストロイカは[24]，労働報酬と物的報酬が経営活動の最終結果と密接に関連する完全独立採算制をめざすものである。

1987年6月30日，「国有企業（合同）に関するソ連邦法律」及びその「施行規則に関するソ連邦最高会議決定」が採択された。この法律は完全独立採算制及び自己資金調達制の活性化，ならびに民主的原則の徹底と自主管理の発展を規定し，企業と国家権力機関・管理機関との関係を規定したものであるが，非生産的分野への法の適用を明記した。「施行規則」にはこの法律に矛盾する指令を含む標準文書の速やかな見直し及び廃止を保障しなければならないと，のべられている。1987年12月26日，「非生産分野における国有企業（合同）に関する法律」(No. 1471) が採択された。次いで1988年12月30日，「観客席付スポーツ施設，体育・保健及びスポーツ施設の新しい経済システムに向けての移行措置」(法律 No. 141) が採択された[25]。これら一連の法的整備は，スポーツ組織，スポーツ施設などスポーツ分野における労働組織の権利と自主性を拡大し，同時に独立採算方式による経営結果に対する責任の所在を明確にしたものである。

ところで，資本主義に最高の技術水準と労働生産性を保障したものは，容赦のない弱肉強食の競争であり，利潤追求であり，失業の重苦しい圧迫である。これは極端に先鋭化しているにしても正しい問題提起であるとするペレストロイカの政治経済学は[26]，一面で個人及び各経営組織体の自主的権限を保障するという側面をもつと同時に，他の一面では限りなく資本主義的経済メカニズムに接近するという側面ももつ。独立採算制の導入による有料スポーツ施設の増加や料金の値上げは，社会主義体制の優位性やその社会的達成からの退却を意味し，この新しいメカニズムの導入が料金引上げの免罪符 (индульгенция) になるという論議にもみられるように[27]，社会主義的企業心と資本の論理との異同に関する理論的展開が未だ充分でないということができよう。経済のペレストロイカは，意識のペレストロイカなくしては完遂され得ないというが，資本主義社会におけるプロスポーツとは異なる社会主義的プロスポーツの理念，その理論的展開の欠落，即ち，プロスポーツの成立という現実に対する理論的立遅れを指摘しないわけにはいかない。

VII. 新組織「全ソ連邦フットボールソユーズ」の設立をめぐって

国家体育スポーツ委員会とソ連邦サッカー連盟 (Федерация Футбола СССР) は，サッカー競技の新組織・フットボールソユーズ (Футбол союз СССР) の創設を決定した (1688. 8. 2)。『追加措置』によれば，この新しいスポーツ組織の主たる課題は，①ソビエト国内のサッカーの発展と普及，②サッカー選手の技術向上，③全ソサッカー選手権大会の企画と運営，選抜チーム及びクラブチームの結成とその国際スポーツ行事への派遣などとされている。このフットボールソユーズ創設大会の準備が，国家体育スポーツ委員会と関係する諸組織に委任された (1988. 8. 22)。設立準備委員会 (оргбюро) は，国家体育スポーツ委員会サッカー・ホッケー部会主任兼全ソ連邦サッカー連盟副議長代理 B. コロスコブの下に，次のメンバーで結成された。功労スポーツマスターの P. ダサエフ，A. パラモナフ，B. パニジェリニク，O. プロタソフ，B. ソロビエフ，A. ヤシン，全ソ功労トレーナーの A. ビショベツ及び B. ロバノフスキー，国際審判員の A. スピリン，労働組合全ソ任意体育スポーツ団体主任，ディナモ中央協議会，国防省スポーツ委員会，ロシア共和国スポーツ委員会，ウクライナ共和国スポーツ委員会，モスクワスポーツ委員会，全ソサ

ッカー連盟幹部会などである。

オルグビューローは8章16項からなる全ソ連邦フットボールソユーズ規約（案）を作成し，1988年11月26日の「ソビエツキースポルト」に発表した。約3週間の下部討議を経た後，1988年12月13日，14日の両日，モスクワで開催されたフットボールソユーズ創設大会において，この規約（案）が提案された。

フットボールソユーズは，上級リーグ，一部リーグ及び二部リーグのサッカークラブの統一組織であり，国家体育スポーツ委員会管轄下の自主管理組織である。ソユーズは法人格を有し，その収益にもとづく経済的活動を遂行する。これまでのサッカー連盟（Федерация）の権限は保持され，大衆スポーツと青少年サッカーの発展の諸問題にたずさわる。国家体育スポーツ委員会サッカー・ホッケー部会は，サッカー連盟（Федерация）とソユーズ（союз）の協力の下にその活動を遂行する。

全ソ連邦フットボールソユーズ規約（案）の構成は以下の通りである（各項目の条文を逐一紹介することは省略する）。

Ⅰ．総則，目的と課題（1～3 項）
Ⅱ．組織・管理（4～9 項）
Ⅲ．指導機関の構成原理（10 項）
Ⅳ．執行委員会（11 項）
Ⅴ．定数及び活動の物質的保障（12～13 項）
Ⅵ．地方組織（14 項）
Ⅶ．ソユーズのシンボルマーク（Атрибутика）
Ⅷ．活動の停止

討議の結果，全ソ連邦フットボールソユーズの設立は認められたが，上記の規約(案)は不完全であるとして否決された。この間の事情は，国家体育スポーツ委員会サッカー・ホッケー部会主任，B. コロスコブに対する「ソビエツキースポルト」のインタビュー記事で明らかにされている[28]。

討論の概略は，以下の三点にまとめられる。

1) フットボールリーグのソユーズを創設する。これまでのサッカー連盟（Федерация）は存続させる。
2) フットボールソユーズを創設する。ただし提案された規約（案）は不完全であり，この大会において提起された全ての意見を付度して新たな規約をつくる起章委員会を設置する。
3) フットボールソユーズを創設する。基本的には規約（案）に賛成する。

明らかに，フットボールソユーズの創設に関しては反対がなく，全てのサッカー関係者は，これまでのサッカー連盟（フエデレーション）とは別個の新しい組織（ソユーズ）をつくることに賛成している。大会出席者の多数意見は，この2) の見解に集約される。何故，規約（案）は否決されたのか。問題の所在は，これまでのサッカー連盟とは別個に新しい組織，フットボールソユーズをつくる必要性はなにかという点について不明確であったこと。即ち，新組織，フットボールソユーズ CCCP の主たる目的は何か。エリートスポー

ツの強化は新組織によってはかられるのか。財政的基盤はなにか。組織の自律性はどのように保障されるのか等という点が曖昧であったからである[29]。これらの問題点を踏まえて全面的に改訂された新たな「規約（案）」が，1989年4月6日の「ソビエツキースポーツ」に再度発表された。新規約（案）は9章36項から構成されている。

Ⅰ.「総則」(1～6項）は，フットボールソユーズを自主的な社会的・専門的スポーツ組織であると規定し，身体文化・スポーツクラブのサッカーセクション，サッカークラブ，スポーツ学校，地方ソユーズ及びトレーナ，審判員，専門家，ベテランの統一組織であることを明記している（1項)。ソユーズは，法人格を有し，独立採算制をとるものとする(2項)。ソユーズはソビエトのサッカー競技を代表する組織として，国際サッカー連盟，ヨーロッパサッカー連盟に加盟する（3項)。またソユーズは，国家体育スポーツ委員会，オリンピック委員会と共に，選抜チームを結成しそのトレーニングに責任をもつと同時に，国際競技会へ選抜チームを派遣するなど(5項)，主としてエリートスポーツ競技を中心とした組織であることを明らかにしている。Ⅱ.「ソユーズのメンバー，その権利と義務」(7～13項）では団体加入，個人加入について規定し（7～9項)，Ⅲ.「組織原理」(13項）として民主集中制に基づく自主的な統一組織であると規定した。Ⅳ.「管理・指導機関」(14～22項）では，既に論じた ДФСО の規約改正などにみられるのと同様に，指導機関の役員の固定化を避けるために，任期を定め(19項)，複数候補による選挙（公開あるいは秘密投票）によって指導機関の人事を定めることを明記した(18項)。またⅤ.「指導機関の構成原理」(23項）では，各級機関（конференция, совет, исполком, бюро исполкома）への代議員の選出方法，選出母体について規定した。Ⅵ.「ソユーズの法的地位」(24～32項）では，基本フォンドを形成する自主的な法人組織であると規定し（24項)，独自の事業活動について明記した(26項～32項)。Ⅶ.「資金及び物質的・技術的保障」(33～34項）では，国家体育スポーツ委員会及び労働組合などからの資金援助（ソユーチが完全独立採算方式に移行するまで)，加入費，競技会参加費などの収入，スポルトプログノーズ，ロッテリーからの収益金，印刷出版事業による収益，後援団体からの寄付及び一般市民やその他の社会組織，協同団体からの援助などによって財政をまかなうこととした。Ⅷ.「徴表」(35項）では加入チームの独自のシンボルマーク等の権利について規定し，Ⅸ.「活動の停止」については全ソ連邦フットボールソユーズ総会の決定による(36項）と明記された。

この「新規約(案)」が採択されるか否か。現時点（1989. 4. 30）では不明である。いずれにしても，このソューズの創設に見られるソビエトスポーツ界の動向は，規約文や設置をめぐる意見にも明らかなようにチャンピオンシップスポーツの活性化をねらった新たなテコ入れであると見ることができる。スポーツ組織の改編は，単なる組織の民主化というものではなく，スポーツマンの創意，自主性を引き出すなかで，国際スポーツ界におけるソビエトの優位性を一層追求しようとするものである。

ペレストロイカは，社会の発展を阻害している惰性や停滞，官僚主義の弊害を打破して，社会のあらゆる分野における活力の再生を意図するものである。即ち，これまでの労働集団に対する中央の上意下達的な指導・管理の在り方，労働組織の権利の制限，日常活

動への瑣末な干渉は，不可避的に労働者，労働集団の創意性を阻害し，居候的気分の蔓延を助長し，責任感の喪失をもたらしたというのである。したがって，管理の全面的な民主化を実施し，下からのコントロールを強化し，労働の成果を所得に連動させ，これによって労働に対する主人公的態度，社会主義的勤労意欲を高めようというのである。労働集団の権利と自主性の拡大は，同時に独立採算制の責任の強化と有機的に結びつけられなければならないとする方針はこれまでみたスポーツ組織の改編においても貫かれている。「任意体育スポーツ団体」の規約改正，『追加措置』の採択，「フットボールソユーズ」の創設など，自主的権限を拡大する一方，独立採算制・自己資金調達制の財政的に自立した経営主体としてのスポーツ組織の確立をめざしている。

ところでソビエトはこれまで，他の労働分野と同様に身体文化・スポーツ労働の労働条件，賃金の算定基準を定めている[80]。プロスポーツの場合，こうした平均基準にとらわれずに財政的基盤の許す範囲内で自由にその基準賃金を決定できることは『追加措置』において明記されている。プロスポーツに対する社会的価値概念が成熟していないソビエトにおいて，プロスポーツ労働の対価をどのように算定すれば，プレヤー個人のみならず社会的にも支持を得ることができるのであろうか。外国の賞金試合で活躍するソビエトのプロ選手の報酬の取扱いについては，今日でも問題になっているが[81]，プロスポーツの成立とは獲得賞金の取扱いや賃金について，経営主体（個人あるいは集団）の自由裁量権を大巾に認める方向に進まざるを得ない。その際，スポーツの商業主義化は不可避である。即ち，スポーツ行為が社会的有用労働のひとつとして確立することと，スポーツ行為がひとつの商品として社会的に成立することとは同じではない。スポーツが商品経済のメカニズムに組みこまれることによって，スポーツの商業主義化が避けられないことは，オリンピックをはじめとした今日のスポーツの現実が明らかに示している。ソビエトにおいても独立採算制のプロスポーツの場合，収益を無視しては成立し得ない。即ち，スポーツが金儲けの対象となる，あるいは利潤追求がスポーツ行為の自己目的となるスポーツの商業主義化は，独立採算制のプロスポーツの場合，ひとつの避けられない帰結と成りえないだろうか。はたして社会主義プロスポーツ論は成立し得るのか否か。ソビエトの社会主義プロスポーツ論が明らかになった段階で改めて論議したいと思う。

注

1) 朝日新聞「プロチームソ連で誕生」(1987. 9. 21).
読売新聞「ソ連プロ化容認へ」(1988. 4. 10).
2) A. B. Серебряков, Н. И. Пономарев, "Социогогия спорта США на службе капитализма", (ФиС), 1987, стр. 143-144.
3) 朝日新聞「ソ連・東欧新事情」(1987. 12. 20) はボディビル復権に関して，78年2月のソビエッキースポルト紙のボディビル批判の記事を紹介している.
4) N. N. Shneidman, "The Soviet Road to Olympus, theory and practice of soviet physical culture and sport", 1978, p. 16.
5) A. Timofeyev, Ye. Kopytkin ed., "Soviet sport-the success story, (Ruduga), 1987, p. 72. (1985. 5. 29 付のソビエッキースポルトには，女性サッカーチームが成立したとある)
6) Б. П. トガリノフ，岩崎訳「価値とはなにか」大月書店，1975.
栗田賢三「マルクス主義における自由と価値」青木書店，1975.

7) В. М. Выдрин, "Физическая культура как ценность", (знание), 1976.
В. М. "О ценностном аспект физической культуры, ТиПФК. 1976, 5-8.
В. М. Выдрин, Под. ред., "Сопрт в современном обществе", (ФиС), 1980.
8) 田中良子「ソ連の身体文化理論をめざす三つの系譜」，体育学研究 Vol. 28.
9) ТиПФК (2989. 2) の巻頭論文 "спорт и перестроика, спорт и социлизм" では，「社会主義におけるプロスポーツについて語ることは，既にむなしい。プロスポーツは既に存在し，存在する権利をもっている」とのべている．プロスポーツの成立という現実に対する理論的無気力を指摘しないわけにはいかない。また，最近の「ソビエツキースポルト」の記事，論説には次のようなものがある．
"что такое профессиональный футбольный клуб?" (1988. 10. 19, 10. 26, 11. 2).
"какой счет, хозрасчет" (1989. 1. 19).
"право на бизинес" (1989. 1. 31).
"престиж и коммерция" (1989. 2. 21).
"А что выигрывает потребитель?" (1989. 3. 21) などは，いずれも新しい経済メカニズムの導入とそれに伴う国民の疑問に答える記事となっている。海外のプロスポーツを批判的にとりあげ，社会主義のプロとは異なることを強調している．
10) 見田宗介「価値意識の理論」，弘文堂，昭47，18頁.
11) Б. П. トガリノフ，前出書，21頁-22頁.
12) 島崎 仁，「体育科教育の新しい方向」，『大阪教育大紀要』，31巻，No. 2-3. 1983. p. 175-184.
永井 博，「スポーツと基本的人権」，『スポーツのひろば』，No. 187, 1989. 3, p. 26-30.
13) 高田 純，「マルクス主義価値論論争」，『唯物論研究』，汐文社，1983. 8号，63頁.
14) 前出書 (5)，p. 72.
15) Sport in the USSR, "Football forecasts in our favour" (Pravda) 1989. 3, p. 9.
16) Советский спорт, "Футбольный клуб" (1987. 9. 19).
17) 前出 (15)，p. 10.
18) Советский спорт, "Футбольный клуб" (1987· 9. 19).
19) В. А. Ивонина, "Спутник физкультурного работника", (ФиС), 1977. стр. 66-95.
Г. И. Елисеев, В. Ф. Догинов, "Физкультурно—спортивная работа профсоюзов", (профизлат). 1977. стр. 15-33.
20) З. Н. Ивоновна, "Спорт в СССР" (Русскии Язык), 1982. には，全ソで36のДСО登録団体，5500万人の会員を組織しているとあるが，数え方によっても異ってくるのか研究者によってДСОの数が異なる．
21) Советский спорт. "проект устав всесоюзного добровольного физкультурно—спортивного общества профсоюзов", (1987. 10. 21).
22) Советский спорт, "устав ВСДФСО профсоюзов", (1987. 4. 28).
23) Советский спорт, "с днем рождения, футбольный союз!", (1988. 4. 17).
24) M. S. ゴルバチョフ「ソ連共産党第27回大会へのソ連共産党中央委員会政治報告」，(1986. 2. 25)，『今日のソ連邦』1986年第6号付録，p. 25.
25) Советский спорт, "положение о переводе спортивно—зрелищных предриятий, физкультурно—оздоровительных и спортивных сооружений на новые условия хозяйствования" 1989. 3. 28.
26) Л. И. アバルキン，小川和男監訳「ペレストロイカの政治経済学」日ソ図書，昭61，45頁.
27) Срветский спорт, "А что выигрывает потребитель?", 1989. 3. 21.
28) Советский спорт, "Футбольный союз—да, проект устава—нет", 1988. 12. 15.
29) Советский спорт, "каким бить футбольному союзу?", 1988. 12. 1.
30) В. Н. Уваров,「правовые основы физической культуры и спорта」(ФиС), 1978.
31) 朝日新聞「ハーフタイム」(1989. 4. 16) には，ソ連の女子テニス選手ナタリア・ズベレワが米フロリダのスポーツエージェント，プロサーブ社と契約したとある．1988年度の賞金獲得額は約4800万円であった。賞金はソ連テニス連盟に送られ，ソ連からは週に約13万円とその他に経費が支払われるだけだったが，これからは大会の賞金や他の収入を直接獲得することがで

きると報道された（ロイター共同）．これに対して，「ズベレワの突然の行動」"Неожиданный шаг Наталии Зверевой. что за ним？" という記事でソ連国家体育スポーツ委員会の見解が表明されている（советский спорт, 1989. 4. 19).
体育スポーツ委員会の Ю. ポルトノバは，外国で活躍する賞金試合出場選手の賞金の取扱い方については，外国の例などを参考に，勝利へのモチベーションを高める物質的刺激の在り方とも関連して現在鋭意検討中であるとのべている．
ズベレワの例は，こうした作業に較べて現実が先行してしまった例であると，スベレワの行為を認める好意的な見解を表明している．